

3. 漁況予報調査研究費

1) 平成 13 年度アユ資源調査結果概要

鈴木隆夫・田中秀具・井出充彦・酒井明久・大山明彦・氏家宗二

【目的】琵琶湖産アユは、琵琶湖漁業のみならず、全国の河川放流や養殖用種苗としても重要である。そのような背景から、湖産アユの資源状況を把握するため継続的に資源調査を行っており、漁況予報の資料としている。本年度も同様の調査を行い、過去の結果と比較を行った。

【方法】漁獲体型調査、ヒウオ生息状況調査、産卵調査をこれまでと同様に行った。

【結果】

(1) 漁獲体型調査

ヤナ漁獲アユの体型は月による変動が大きく(図 1)、5、6 月は平年並みであったが、その前後の 4 月と 7 月は平年値を下回った。エリ漁獲アユの体型は、11 月と 12 月は平年並みであったが(図 2)、1 月から 4 月は平年値を上回り、6 月以降 8 月までは平年値を下回った。

(2) ヒウオ生息状況調査

表 1 にヒウオ生息状況調査結果を示した。一曳網あたりの平均採集尾数は、第一次調査から第三次調査まで平年値を下回り、特に第二、三次調査では平年値の 31～37%程度しか採集されなかった。しかし、平均体重は第一次調査から第三次調査まで常に平年値を上回り、第三次調査では平年値比の 157%もあった。図 3 に調査日とヒウオ平均体重との関係を示したが、やはり第三次の伸びが著しい。

調査におけるヒウオの採集尾数は少なかったが、各単協では平年並み以上に漁獲されていた。この理由として、例年、産卵早期の河川は渇水状態にあるが、今年は水量が充分で、産卵開始が早かったため大型個体の割合が増えたこと、さらに大型個体は網に入りにくいことが影響したと思われる。

(3) 魚探調査

平成 13 年の魚探調査結果を図 4 に示した。魚群小群換算値は、1 月から 8 月まで期間を通じて平年値を上回り、おおよそ平年値と同様の変化を示した。魚群小群換算値の平年値比は、7 月で 250%と高くなったが、2 月から 6 月までは 150%近辺で大きな変化はなかった。

(4) 産卵調査

親魚状況は、今年の産卵開始が平年より早かったせい、第四次調査(10 月上旬)以降は急激に減少した。総有効産卵数は 174 億粒と、平年値(192 億粒)の 91%であった。今年の産卵ピークは、例年よりも早い傾向にあった。即ち、過去 10 年間のうち、第一次調査で産卵が認められたのは平成 3、4 年の二回だけで、しかも今年はその時の約 10 倍産卵数が多かった。第二次調査では、平年値の 3.8 倍だったが、第三次調査から平年値を下回り(0.93 倍)、第 4、5 次調査では平年値の約半数となった。

河川別の有効産卵数は、石田川が約 69 億粒、姉川が約 47 億粒で、この二河川だけで全体の半数以上を占めていた。次いで、知内川、安曇川南流の順に多かった。

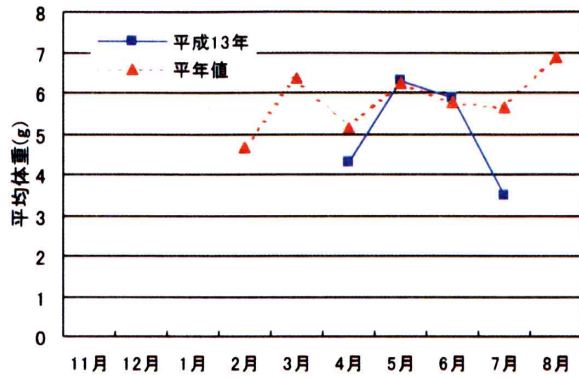


図1 ヤナ漁獲アユの平均体重経月変化

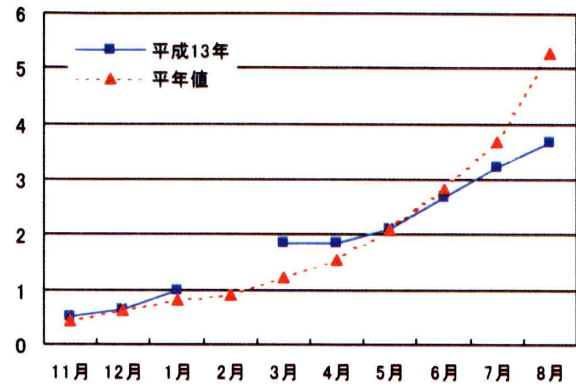


図2 エリ漁獲アユの平均体重経月変化

表1 ヒウオ生息状況調査結果

	一曳網平均採集尾数			ヒウオ平均体重(mg/尾)		
	平年値	平成13年	平年値比(%)	平年値	平成13年	平年値比(%)
第一次調査(10月17,19日)	159	129	81.1	16.2	16.7	103.1
第二次調査(11月13,15日)	202	74	36.6	39.0	41.2	105.6
第三次調査(12月12,18日)	88	27	30.7	64.5	101.8	157.8

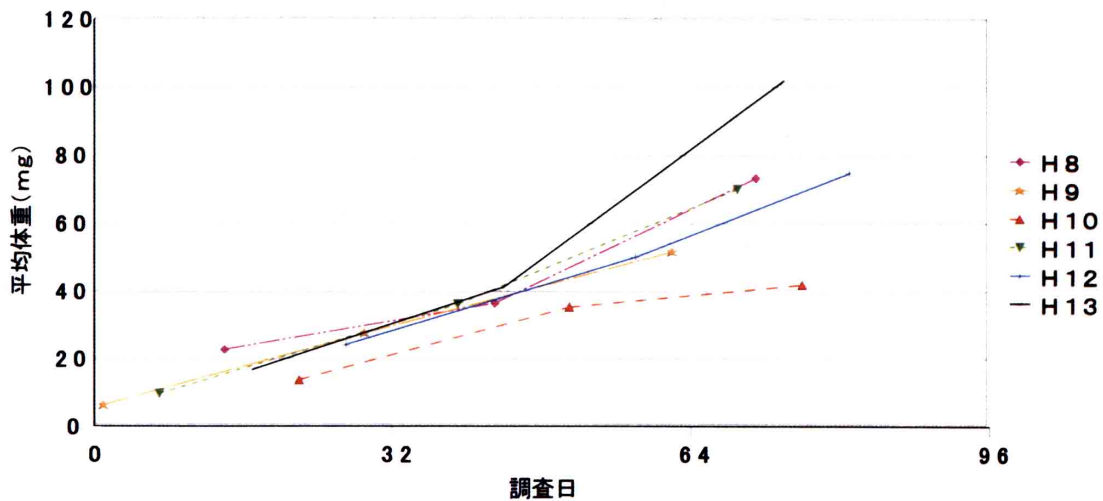


図3 調査日とヒウオ平均体重との関係

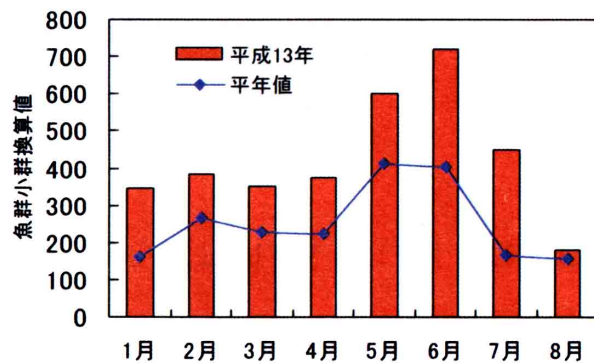


図4 魚探調査結果

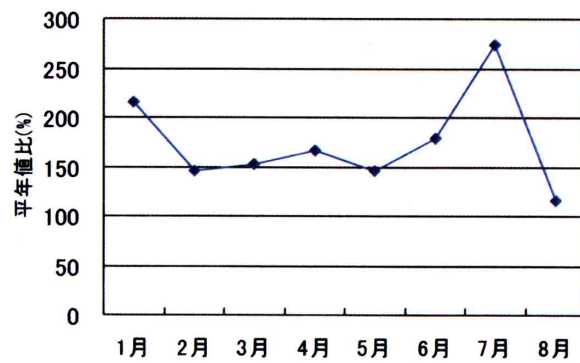


図5 魚群小群換算値の平年値比